医師ビアンションにおける動物比喩について

沖久　真鈴

1．はじめに

バルザック（1799-1850）は、動物界と人間界を二重構造にして描く作家である。バルザック自身『人間喜劇』の＜総序＞（1842）でも言及しているが、「自然」と「社会」に類似を認め、博物学者ビュフォンがあらゆる動物種を描き出したように、あらゆる人間種を描き出そうとした。しかし、人間社会には「社会的地位」というものがある。それは自然界には存在しないため、社会の「種」を描き出そうとすると、動物界の「種」に対して２倍にはなるはずだと言っている(1)。実際動物と人間の類似を、また社会における人間の特異性を描き出すため、バルザックは人間を描く際、多くの動物比喩を使う。これまで筆者は、バルザックの『人間喜劇』において、どの登場人物にどのような動物比喩が使われているか、それが物語の展開にどう関わり、人間喜劇の世界観にどう貢献しているか、について考察をしてきた(2)。分析が追い付いていない作品も含め44作品(3)の中で比喩として出会った動物種は、（別表）に記載するが109種にも及ぶ。バルザックは神話やラ・フォンテーヌの『寓話』に見られる動物とそのイメージを踏襲しながら、同時にそれまでには見られなかったような珍しい動物も多く使用している。例えば哺乳類だとキリンやオランウータン、水生生物だとコバンザメ、アザラシ、シビレエイ、などである。これは博物学の発展や、動物園の誕生という時代背景に影響を受けていると思われる。19世紀当時ナポレオンの海外遠征の戦利品として、また政治の贈答品として多くの珍しい動物たちがフランスに持ち込まれた。さらに新種の発見も相次ぎフランス人が知る生物種の数は飛躍的に増えた。さらにバルザックは例えば「犬」というだけではなく、ブルドッグ、プードル、ニューファンドランド犬など、犬種まで分類

して比喩を使い分けている。

「鳥」においても同様だ。時代はバルザックより後になるが、作家マルセル・プルーストも度々鳥の比喩を使うことで知られる。プルースト研究者の福田桃子氏によると、『失われた時を求めて』の作中では100回以上も鳥の比喩が使用されているが、プルーストは「鳥」（oiseaux）という語で表現するだけであり、博物学的に何の鳥であるか判別・分類することには無関心であるという(4)。それを考えれば、いかにバルザックが個々の動物の性格や習性、特徴に着目していたか、それを人間に対応させいかに博物学的に「分類する」ことに関心を抱いていたかがわかるだろう。

『人間喜劇』のあらゆる登場人物があらゆる動物種にたとえられているのを分析するうちに不思議なことに気が付いた。『人間喜劇』で用いられている＜人物再登場法＞により、最も多くの作品に登場する医師のビアンションに、動物比喩がほぼあてられていない、ということである。正確には29作品に登場していながら動物にたとえられているのは『無神論者のミサ』（1836）の一か所だけだ。まるで、小説空間が動物園かと錯覚するほど動物比喩が多く使われている『ゴリオ爺さん』（1835）においてさえも、ビアンションが物語の展開に不可欠な作品においてさえも、ビアンション以外の登場人物は動物にたとえられているのに彼だけはたとえられないのだ。これはなぜだろうか。彼の登場回数と物語への貢献度を考えれば、最も多く動物比喩が使われてもいいはずである。本稿では、ビアンションに焦点を当て、彼の人間性や役割を分析しその特異性について考察してみたい。彼の立ち位置に、他の登場人物とは違う特徴があるはずで、それが動物比喩の使われない理由になっているのではないかと推測する。今回はとりわけビアンションが印象的に登場する『ゴリオ爺さん』『無神論者のミサ』『禁治産』『従妹ベット』の四作品を中心に分析していく。

2．ビアンションの立ち位置とは――『ゴリオ爺さん』の場合

『人間喜劇』は100編ちかくの作品から成る壮大な物語群であるが、その中で医師オラース・ビアンションは27作品に登場しており、プレイヤード版の第12巻で「『人間喜劇』に付随する草案」として分類されているものでも２作品に登

場すると、または言及されている。これはユダヤ人銀行家であるニュシンゲン男爵の31作品に次いで登場回数が多く、またラスティニャックやド・マルセーといった『人間喜劇』を代表するスターキャラクター達を超える頻出ぶりである[(5)]。彼が登場するのは『ゴリオ爺さん』『あら皮』『幻滅』『娼婦の栄光と悲惨』『従姉ベット』というようなバルザックの最もよく知られている作品である。ビアンションが初めて再登場するのは＜人物再登場＞の技法が初めて適用された1835年の『ゴリオ爺さん』だ。この物語が設定されている1815年の時点では、パリで医学を学ぶ医学生であったが、ここから30近い作品に再登場しながら、医師としてのキャリアを積んでいき1836年ごろに某医院の医院長となり、レジオン・ドヌール四等勲章を受勲する。パリ一の名医として『人間喜劇』のあらゆる登場人物の病を治療し、最期の瞬間に立ち会っている。ビアンション自身は一度も主役にはならないが、物語の決定的な展開に関わり、しばしば死の床で暴かれる登場人物の隠された人生や、告白を聞く重要な役どころとなっている。まずは『ゴリオ爺さん』における彼の人間性や立ち位置など、周りの登場人物と照らし合わせながらみていこう。

2-1. ビアンションの人間性とは

パリで最も貧しい界隈にある下宿屋ヴォケー館には、身分も出身も事情もさまざまな人間が暮らしている。そこにビアンションの生涯の友となる、田舎から出てきたばかりの学生ラスティニャックが暮らしている。ビアンションはヴォケー館に夕食をとりに来ているだけの医学生である。ヴォケー館には、脱獄徒刑囚のヴォートランも変装して身を隠しているが、ラスティニャックのパリで出世したいという野心に目をつけ、犯罪を持ちかける。それは真面目に労働するより金持ちの娘と結婚して遺産を相続する方が生涯年収が高いのだから、自分が貴族の父親を持つ２階の下宿人タイユフェール嬢の兄を殺してやるので、ラスティニャックはタイユフェール嬢と結婚して遺産を相続し、自分に手数料をよこすように、というものだった。ラスティニャックは、一度は断るが出世を考え心が乱れ思い悩む。そんなとき、リュクサンブール公園でビアンションと出くわす。彼はビアンションに、「おれは狂ってしまったのさ。治してくれ」と相談する。人の命と引き換えに莫大な金が手に入るとして、君ならどうする

かと尋ねると、ビアンションはきっぱりと、自分なら嫌だと拒否する。そして次のように説明する。

> おれは大人しく親父の跡を継いで、田舎でささやかな暮らしをするつもりだが、それで満足だな。(…) ナポレオンだって二度夕食をとったわけではないし、キャピュサン病院でインターンをしている医学生以上に愛人を持てたわけでもない。俺たちの幸福は、君、いつでも足の裏から後頭部までの間に収まっているのさ(6)。

この説明を聞いてラスティニャックの心はすっきりと晴れ、ヴォートランとは手を組まないと決めるのだ。そして人生の岐路で正しい選択をさせてくれたビアンションに感謝し、ずっと友達でいよう、と言うのである。金や権力に欲望を感じるラスティニャックと、そこから距離をおき、冷静に見つめるビアンションのスタンスが見てとれる。ラスティニャックはしばしば「鳥」にたとえられ、実際鳥のようにパリの街を飛び回りながらさまざまな階層の社会に顔を出す。ヴォートランもいつも「鳥」のように歌を口ずさみ、陽気な人物を装いラスティニャックに近づく。しかし、「ライオン」のような筋肉と、「クマ」のような胸毛をたくわえ、それらの動物比喩から危険人物であることが垣間見える。ヴォートランはラスティニャックに潜む野心の強さを、「オオカミ」や「ヤマネコ」「ライオン」「鷲」といった動物比喩で表現する。まだ開花していないラスティニャックの、社会の上層部に君臨する強さや可能性の高さを感じさせる。

2-2. ビアンションの高い観察眼とは

ビアンションはまた、本質を見抜く観察眼を持っている。ヴォケー館の住人であるミショノー嬢を見て、ビアンションはヴォートランに向かってこう話す――

> あのコウモリみたいな女を見ると、いつも寒気がするんですよ。僕はガルの骨相学を研究しているんですが、彼女の頭にはユダの隆起がありますね。(…) 誓って言いますが、青白いばあさんを見ていると、天井の梁をしまいには食ってしまう、ひょろ長い虫を思い出さずにはいられません(7)。

のちにミショノー嬢が警察と通じてヴォートランの化けの皮をはぎ、ヴォート

ランを逮捕させるスパイとして動く人物であることが明らかになるが、この時はヴォートランも気が付いていない。ビアンションは、ミショノー嬢をヴォートランと同じく鳥の仲間か、または鼠の仲間であるのかあいまいな存在である「コウモリ」にたとえながら裏切り者であることを予知し、見えないところであなたは追い詰められていますよ、とヴォートランに進言している形になっている。本人は無意識であるのだが。

また、ヴォケー館で下宿人たちから、悪徳や恥辱に溺れた老人として噂され嘲笑の的になっているゴリオ爺さんに関しても、こう見抜く――

> 彼の頭蓋骨を調べてみたんだが、隆起が一つしかないんだ。父性の隆起しか。あれはきっと≪永遠の父親≫だぜ(8)。

その通り、ゴリオは二人の娘にすべてを捧げる父親である。いつもビアンションだけが外的情報なしに医学的な見解から、噂に惑わされず、本質にたどり着けるのである(9)。

2-3. ビアンションは物語を展開させる

ビアンションはまた物語を大きく展開させるキーパーソンとしての役割を負っている。彼はキュヴィエの講義から帰る途中、ジャルダン・デ・プラントのベンチで警察とミショノー嬢とポワレの三人が話をしているのを偶然目撃する。ヴォートラン逮捕の計画を立てている秘密の打ち合わせであるがビアンションは知る由もない。そしてヴォートランの異名である「トロンプ・ラ・モール（不死身）」という言葉を耳に挟むが、それもまたヴォートランのことだとは理解していない。別の日、ミショノー嬢が警察との打ち合わせ通り、ヴォートランのコーヒーに薬を入れ卒中を起こさせた。そのすきに、服を脱がせ肩をばしばしと叩くと、「ひな鳥のように白い」肌が赤くなり、T.F（強制労働）の文字が浮かび上がるのだ。無垢なイメージの肌にあらわれる犯罪者の証というコントラストが印象的である。下宿人たちが唖然とする中、ビアンションだけは次のような行動をとる――

> 病人に吐剤を与えることを思いついた後で、ビアンションは吐しゃ物を科学的に分

析するために、自分の病院へ持って行かせた。ミショノー嬢が懸命になってそれを捨てさせようとするのを見て、彼の疑念はますます強まった。その上ヴォートランがあまりに早く回復したので、ビアンションは下宿のこの陽気な人気者に対する何かの陰謀を勘ぐらずにはいられなかった(10)。

ビアンションは常に冷静に真実を探求している。さらに、あっさりと回復した強靭なヴォートランに無自覚にこう言う――

ミショノー嬢が一昨日、「トロンプ・ラ・モール（不死身）」とかいうあだ名の男のことを話していたが、それこそあなたにぴったりの名前だなあ(11)。

これを聞いたヴォートランは雷に打たれたようにさっと青ざめ、射るような視線をミショノー嬢に向け、ミショノー嬢は膝から崩れ座り込んでしまうという展開になる。そこで警察が踏み込み、抵抗するヴォートランは飛び上がって「ライオン」のように吠え肉食獣のように凶暴な本性をあらわにする。ヴォートランは逮捕され、残されたミショノー嬢は下宿人たちに裏切り者と罵られ、「毒蛇」のような視線で応戦する。ここまでがヴォートランを巡る物語の一つの区切りであるが、下宿人たちがさまざまな動物にたとえられる中、これほど物語展開に関与しているビアンションは何の動物にもたとえられない。

2-4. 医者としてのビアンション

続いて、ゴリオを巡る物語後半部をみていこう。ゴリオの二人の娘、デルフィーヌとアナスタジーは、それぞれ大銀行家と貴族に嫁いでいる。「駿馬」や「蝶々」にたとえられ、贅沢で華やかな暮らしぶりに見える。しかし実際は夫に金を自由にさせてもらえず父親のところへ金をせがみに来ている。ゴリオは「カタツムリのような軟体生物」にたとえられ、「イヌ」のように惨めな極貧生活をしながら娘たちに喜んで金を工面しているが、とうとう立ち行かなくなり、二人の娘に破産すると泣きつかれる。しまいには、ゴリオの前で、姉妹が口論を始め、娘を救ってやれないことに絶望したゴリオは錯乱し壁に頭を何度も打ち付ける。その後食堂でビアンションはゴリオが食事する様子を見て、ゴリオに一種の痴呆状態があることを認め、ラスティニャックにこう尋ねる――

あの病気を引き起こしたのがどんな事件が知らないかい？　何か激しい打撃を受けて、それで気力がくじけてしまったにちがいないんだ[12]。

ここでもラスティニャックの観察力の高さが光る。ビアンションの医学的視点の特徴について、松村博史氏は、身体 physique と精神 moral の両面から人間を捉えている点にあると論じている[13]。19世紀の前半においては、たとえばカバニスの『心身関係論』（1805）のような本が出版され知識人の間で広く読まれていたが、ビアンションの場合、表面的に心身の相関関係をたどるだけではなく、直感的に人間の全体像を捉え共感する能力にもなっているという。何がゴリオの心を傷つけたのかまで気にする彼の在り様がみてとれる。それはまた次のような場面でもわかる。ビアンションはラスティニャックと交代で夜通しゴリオの看病に当たる――

昨日も、≪娘たちが踊っている。あの子があのドレスを着ている≫って100回以上もおれに言うんだぜ。娘たちを名前で呼ぶんだ。俺ももらい泣きしたね。恥ずかしいけど、≪デルフィーヌ！　私の可愛いデルフィーヌ！　ナジー！≫なんて調子でやられるとね。嘘は言わない。」と、医学生は言った。「涙がぽろぽろ出てくるんだ[14]」

また、ラスティニャックのやり取りを見てみよう――

「おいおい」とウージェーヌは言った。「それじゃあこの気の毒な爺さんを愛情から看病しているのはおれひとりか？」
「今朝の俺を見たら、君だってそんなことは言わないぜ。」と相手の言葉にも機嫌を損ねずビアンションはつづけた。「経験を積んだ医者というのは、病気しか見ないものなんだ。おれはまだ、病人が見えるんだよ、君[15]。」

こうして心身両面から人間を観察し共感することで患者の真の理解に至っているのである。自身の人生を生きるのに必死な他の登場人物たちを冷静に観察し、診断＝分析するだけでなく、共感もできるのがビアンションの特異な立ち位置といえる。

ビアンションはゴリオの死を確認した後、ラスティニャックと共に死亡届を提出しに行く。娘も代理人も来ないのでビアンションが教会と交渉し、ラスティ

ニャックと二人で葬儀の金を支払う。これだけ物語に貢献しながら、やはりビアンションは最後まで動物にたとえられることはない。

3.『無神論者のミサ』の場合

次に『ゴリオ爺さん』の翌年、1836年に書かれた『無神論者のミサ』を検討しよう。これはバルザックが編集長、兼オーナーとして偽名を使い多くの政治記事を出した週刊新聞『クロニック・ド・パリ』紙に掲載された連載小説である。ビアンションが彼の師である有能な外科医デプランの秘密の告白を聞く物語だ。この物語において、ビアンションの人間性や『人間喜劇』における立ち位置が確立されたと言ってもよく、彼が動物にたとえられる最初で最後の作品である。

ビアンションンの人間性は次のように描写される――

> ビアンションは人の名誉にかかわる問題には常に真正面から取り組むまっすぐな性格の持ち主であり、あれこれ言わずに核心を突き、友人のためなら時間を割いたり夜明かしするのはもちろん、自分のコートを質に入れることもいとわなかった。要するにビアンションは、友人として自分が与えたものにどんな見返りが得られるか少しも気にならなかった。(…) また彼は飾り気のない男だったが、その率直さは水兵のような率直さではなかった。今どきの水兵は外交官のようなずるさを持っているからである。それは、自分の人生に何の隠し事もない、実直な青年の率直さだった。(…) 彼は顔を上げて堂々と歩いたが、頭の中は陽気な考えでいっぱいだった。(…) 陽気さこそは勇気を構成する最大の要素の一つなのである[16]。

『人間喜劇』の多くの登場人物はあらゆる誘惑になびき、私利私欲を満たすために他人の人生をも省みない。または欲の果てに借金を重ねて絶望し、自殺に追い込まれる。それだけに、これほど実直、かつ陽気で前向きな性格を付与されたビアンションは貴重である。彼はこう描写される――

> 彼はほとんど借金をしなかった。彼はラクダのように節制したが、雄鹿のように活発で、考え方も行動実にしっかりしていた[17]。

これがビアンションに動物比喩があてられた唯一の箇所である。ラクダと雄鹿

から受けるイメージは節制と活発そのものであり、欲深い登場人物たちがたとえられる肉食動物ではなく、かといって軽率や愚鈍のイメージで用いられる動物でもない。一方彼の師デプランは「ライオンと闘牛を合わせたような激しい気性[18]」と描写される。ある日ビアンションは無神論者であるはずのデプランがサン＝シュルピスの教会の中でミサを聞いているのを目撃し大変驚く。その日付を覚えておいて、一年後の同日に待ち伏せをしているとやはりデプランが教会に現れミサを聞きに来る。堂守に聞き込みをしたところ、彼は20年前からこのミサを寄進し、年に4回聞きに来ているという。さらに7年後、ビアンションが教会で待っているとやはりデプランが現れたので思い切って彼の隣の席に座り、無神論者の先生がなぜこれほど熱心にミサに通っているのか教えてほしいと理由を訊ねる。そこでデプランが隠してきた過去を弟子のビアンションに打ち明けるのだ。それはデプランが貧しい医学生のころから、まるで父親のような無償の愛で支援してくれた熱心なカトリック教徒の男の話であった。彼なしに今のデプランはなく、彼の亡き後、彼の信仰を尊重してミサを続けているとうことだった。この告白のあと、ビアンションが師デプランを看取ったことが記されて物語は終わる。

『無神論者のミサ』では、ビアンションは探偵のような探求心と粘り強さをもってデプランの隠された半生を聞き出す役割であるとともに、以降、『人間喜劇』の世界でこの話を語れるのはもはや作家バルザックの他にはビアンションしかおらず、語り手と同等の役割が付与されていると言えるだろう。

4.『禁治産』の場合

『ゴリオ爺さん』と『無神論者のミサ』でビアンションの性格や『人間喜劇』における役割がだいたい確立されたように思われ、以降の作品ではビアンションが動物にたとえられることは一切なくなる。『無神論者のミサ』と同年、また『クロニック・ド・パリ』紙に掲載された『禁治産』をみてみよう。この作品ではさらにビアンションのキャラクターが同年代の友人と対比され、明瞭に描かれている。この物語は親族の申し出により、その者が財産を処分し、また管理する権利を、心神喪失や狂乱などの原因で管理能力がないことを理由に取り上

げる「禁治産」をテーマにした作品である。

4-1. 観察眼・医者としてのビアンション

この物語は、パリの高級住宅街で夜会を終えて出てきたラスティニャックとビアンションの会話からはじまる。ラスティニャックは前作『ゴリオ爺さん』で出会った、ゴリオの娘でありニュッシンゲン男爵の妻であるデルフィーヌ・ド・ニュシンゲン男爵夫人と付き合っているが、それを今、夜会をしてきた屋敷のデスパール夫人に乗り換えようと思う、とビアンションに相談する。するとビアンションは次のように答える――

> 僕がどう考えたか知りたいかい、ウージェーヌ？あの侯爵夫人のために君がニュシンゲン夫人と別れるというのなら、そりゃ、片目の馬を両目の見えない馬に乗り換えるようなものだぞ(19)。

前作『ゴリオ爺さん』で、ラスティニャックは出世するためにはいかに女性の力が必要かをボーセアン夫人から学んだ。女性は「宿駅ごとに乗り潰して捨てていく、乗り継ぎ馬(20)」として考えなくてはならない、と教わったのだ。これを知っている友人ビアンションは、せっかく手に入れたニュシンゲン夫人よりも借金がありそうなデスパール夫人に乗り換えるなどありえない、と冷静に忠告している。これに対し、ラスティニャックは、デスパール侯爵夫人は家柄が良く、ア・ラ・モードの女性であり、年利収入が10万リーヴルあるので、いずれ自分をしかるべき地位につけてくれる人物だろうと考えているのだと説明する。しかしビアンションは引かない――

> 僕の言うことを信じるんだ。医者と言うのは、人間や物事を判断するのに慣れている。我々の中で極めて有能な医者は、身体について解き明かしながら、魂も解き明かすのだ。僕たちが今晩夜会を過ごしたあの人の部屋がどれほど素敵でも、あの邸宅がどれほど豪華でも、侯爵夫人が借金まみれだってことがないわけじゃない。(…)いいかい、よく聞くんだ！彼女はあのほっそりとして、白い肌、栗色の髪の毛で、自分のことを可哀そう、と言って欲しくて嘆いて見せる。そのくせ、鉄のような健康に恵まれて、オオカミのような食欲があり、トラのように強靭な力があって、卑

> 怯なところがある。紗や絹、モスリンの布地があれほどうまく嘘の周りに巻き付けられたことはないよ。以上だ(21)。

相変わらず、ビアンションの観察眼は鋭く「オオカミ」「トラ」の比喩を使って冷酷で計算高いデスパール夫人の本質を見抜いている。また、ビアンションは『ゴリオ爺さん』で、ベテランの医者は患者を見ず病気だけを見る、と言っていたが、ここでは、有能な医者はその「両面を見る」のだと言っている。『人間喜劇』でビアンションが目指す医者としての在り方が断言されている重要な台詞である。

さらにビアンションの説教は続く――

> ア・ラ・モードの女性はもはや女ではない。母親でもない。妻でなければ恋人でもないんだ。脳の中にある一つの臓器だ。医学的に言っての話だがね。で、君の侯爵夫人にはそうしたおぞましい怪物のあらゆる兆候がある。猛禽のくちばしを持ち、眼は澄んで、冷たく、言葉は甘い。彼女は機械の鋼のようにピカピカで、全てのものを揺さぶりはする。ただし心は別だ(22)。

「怪物」「猛禽類」という動物比喩を並べてビアンションはデスパール夫人の正体を必死に親友に訴える。しかしどんなに説明しようとラスティニャックは危険性に気付づかず耳を貸さない。

4-2. 人間性・人生の方向性を知るビアンション

ビアンションはラスティニャックに言う――

> ヴォケー館と言う岩に座礁した時から、僕たちは世間の波の下にあるたくさんの砂礫やたくさんの汚物を見ることになったけれど、そこで見たものなんか、実はたいしたことはなかったんだ。上流社会に出入りするようになってから、おれはサテンの衣服をまとっている怪物どもに出会ったんだ(23)。

ヴォケー館で共に社会の表と裏、人間の外身と中身を目の当たりにした二人の若者であったが、『禁治産』の時点ではビアンションのほうが一歩経験値が上がり、さらに真理に迫ることができるようになっているようだ。それもラスティ

ニャックのように出世や恋愛で判断力が鈍ることがないからかもしれない。

二人の生き方の違いは、このあとの別れの場面でも象徴的に描かれる。二人は話しながら外務省の前まで来ると、ビアンションはラスティニャックに「ほら、君のところまで来たよ」と言う。このときはまだ地位にはついていないが、ラスティニャックは実際のちに大臣に出世するのであり、その野心と、また「外交術」に長けていることをからかっている。ちょうどそこへビアンションの乗るべき馬車もやってきてラスティニャックはこう言う――

> こんな風に、おれたちのそれぞれの将来がきちんと要約されることになるわけだ(24)。

ビアンションが乗った馬車が遠ざかるのを見送りながらラスティニャックはつぶやく――

> 良いやつだな、君は、ビアンション！　いつまでたっても誠実な男だ(25)。

どんなに社会経験値が上がろうと、本質を見失わず欲に溺れないビアンションと、欲の渦巻く世界に身を投じて戦おうとするラスティニャックの人生がはっきりと別れの場面で描き出される。ビアンションは常に物事の真ん中にいる。ビアンションの発言で、周囲がいかに大きく振りきっているのか、その欲望がいかに過剰であるかが浮き彫りになる効果がある。やはりここでも自身が動物にたとえられることはないが、ビアンションが動物比喩を用いて相手を表現することで、人物の本性が鮮やかに表現されている。

4-3. 物語を展開させ見届けるビアンション

ビアンションが「トラ」「オオカミ」「猛禽類」と表現したデスパール夫人は、夫が一年前から完全に精神に異常をきたしているので禁治産を適用してほしいと訴訟を起こしている。その訴訟を、ビアンションの伯父、ポピノ判事が担当していることから、デスパール夫人はラスティニャックを通してどうしても判事に会いたいとビアンションに頼んでくる。ビアンションは仕方なく伯父に会いに行くがポピノは誠実な人柄ゆえ、裁判官が訴訟の当事者と食事をすることは法で禁じられていると取り合わない。しかしビアンションがラスティニャックとの友情から、ポピノに事情聴取というかたちなら可能なはずだと食い下が

り説得する。そのかいあって、ポピノ判事は翌日デスパール侯爵夫人の邸宅をビアンションと共に尋ねることになる。ここでもビアンションが物語を展開させる役割を負っている。さらに、その後の展開を見守る立場でもある。デスパール夫人の前に立った叔父が、「怖気づいた動物」のように突っ立っており、夫人がこれは勝機ありと馬鹿にしたような眼差しを送ったのを見逃さない――

> ビアンションは、痛みを口にせず拷問を甘んじて受けることを決意した人間のように、冷静で厳しい顔つきをしている。けれども心の中では、叔父がマムシを踏んで進むように、この女を踏みつぶしながら進んでいく力のあることを願っていた。マムシという言葉が浮かんだのは、夫人が長いドレスを着、そのくねるような姿勢、長い首に小さな頭、それに波打つような動きからである(26)。

「怖気づいた動物」に見える誠実な叔父が目の前の「マムシ」女に負けないでほしい、真実が欲望によって歪められるのを許しがい、と思うビアンションがみてとれる。こうして叔父を夫人の邸宅に導き、その会見にも同席し事の進行を見守っている。このあと２回目にポピノが夫人の邸宅を訪れる際は同行していないが、後から叔父に事の顛末を聞いたということが、『娼婦の栄光と悲惨』の中でビアンションがリュシアンに語っていることから分かる。医師ビアンションはこのように物語の随所に観察者として立ち会い、その顛末を俯瞰することが出来る立場に置かれているのだ。

4-4. 聖職者、医者、法曹のなかで別格化される医者ビアンション

ビアンションの「医者」という職業について考えてみたい。しばしば『人間喜劇』においては、聖職者と医者と法律家はひとくくりに語られる。1832年に書かれた『シャベール大佐』という作品の中にも、以下のようなセリフがある。代訴人デルヴィルが自分の事務所を継いだゴデシャルに言う――

> 「知っているか、君」とデルヴィルは少し沈黙した後で再び口を開いた。「この社会には三つの人間、聖職者と医者と法律を扱う法曹がいて、彼らはこの世をいいものだと評価することが出来ない。連中は、黒い衣服を持っているのはあらゆる美徳やあらゆる幻想の死を悼むために着るためだ(27)。」

この三つの職業は物語の影の主役になることもあるが、助言者、観察者としての役割を担うことが多いのだ。しかし、興味深いことに2-1. において見た、ビアンションがラスティニャックに言った「医者と言うのは、人間や物事を判断するのに慣れている。」という一節は、草稿の時点では「代訴人や、医者や、判事や高利貸しというのは人間を判断するのに慣れている。」であった。それが『クロニック・ド・パリ』紙に連載されるときに代訴人と判事と高利貸しが削除され「医者は」と限定され、さらに人間だけでなく、物事を判断するのに慣れていると書き換えられたのである[28]。ここで、医者であるビアンションに、他の職業にはない特別な役割が付与されていることが感じられる。その役割とは何か。人間観察を通して社会の仕組みを捉えようとする俯瞰する役割である。さらに医者が他の職業と異なる点について述べられた箇所がある晩年に書かれた『従妹ベット』をみてみよう。

5.『従妹ベット』の場合

バルザックの最晩年の作品『従妹ベット』にまでビアンションの活躍ぶりが見られる。この作品は怪物級に欲にまみれた人間たちがこれでもかというほどに登場する。ヴァレリーは男を意のままに操りたいという支配欲だけでなく、金銭欲もすさまじい。ベットは「憎しみ」そのものになったと称されるほど復讐欲を爆発させ、ヴァレリーと共に男たちから巻き上げた金を数える日々だ。香水商クルヴェルも金勘定に忙しい。ユロ男爵は一家を崩壊させるほど色欲にひた走る。また一見欲のない妻アドリーヌも、夫崇拝と献身が度を行き過ぎている。どの人物も狂うほど過剰なエネルギーを持っているのだ。まるで『人間喜劇』の問題児を集結させたような作品であり、人間の欲にまみれた行き着く先を、バルザックが晩年に総仕上げとして描いたと思わせる。その「欲」や「過剰なエネルギー」のせいで命を焼き尽くしてしまう彼らを治療するのがビアンションであり、死の宣告をするのもビアンションなのである。

ビアンションが気管支炎と診断し、もう長くはないと診断したベットは、すさまじい復讐劇を繰り広げた割に、あっけなく死んでしまう。ここには「葬儀では家族全員が涙にくれた」と書かれているだけで、うっかりすると読者が見

落としてしまうほどだ。一方、ヴァレリーは前代未聞の苦しみを味わう。髪が抜け落ち爪がはがれ、悪臭を放ち、男たちを誘惑してきた美貌が徐々に崩れていくさまが細かく描かれる。その激しい朽ち果て方をビアンションは見ている。どういう生き方をしたかにかかわらず、死は誰にでも訪れるのであり、皮肉なことに死に方もまた人それぞれであることを近くで感じている人物であるといえるだろう。ビアンションはアドリーヌに医師と言う職業について次のように言う――

> われわれ医者には、うまくゆけば病人を治癒できるという喜びがあります。奥様方に一家を飢えや堕落や貧困の恐怖から救い出して仕事を与え、社会に復帰させる喜びがあるのと同じです。しかしこれにひきかえ、司法官や検事や弁護士などは、どんな慰めがあるのでしょう。彼らは、私利私欲のために行われる極めて悪辣な企みを一生の間追って過ごすのですよ。この社会的怪物（monstre social）というのは、成功できなかったことを恨みはしても、悔恨などは決してしないのです(29)。

他の職業と異なるのは根源である病を治療できる喜びがあることだ。では例えば聖職者も医者と同じような喜びがある立場ではないのかと思うと、それは違う。社会的怪物（monstre social）という根深い罪の根源はどこから来るのか、と尋ねられたビアンションの説明をみてみよう――

> 「宗教の欠如のせいですね」と医者が答えた。「それと、金銭の力の増大のせいでしょう。金銭はエゴイズムの権化そのものですからね。昔は金がすべてではありませんでした、金に勝るものが認められていました。貴族があり、才能があり、国家への奉仕がりました。ところが今日では、法律が金銭をすべての尺度に変えてしまい、政治力の土台にしているありさまです(30)。」

もはや聖職者は権力を失い、法曹も高利貸しも決して悔恨することのない悪ばかりを見る職業と言うことだ。さらに――

> 「真の医者は」とビアンションは答えて、「医学に情熱を燃やすものです。社会に役立つからという思いと同時に、医学への情熱もわれわれ医者たちを支えているのです。（…）たいていの人はわたしを心のない人間だと思い込んでいるようなのです

が。(…) ここ十日ほどいつもその病人のことが頭から離れないんですよ[31]。」

「宗教」であれ、「金」であれ、社会が変わればそれを向き合う人間のスタンスも変わる。しかし病の根源を科学的に解明しよう、真実に到達しようとする姿勢には情熱と喜びがある。内側から人間を治癒できるからだ。『ゴリオ爺さん』で涙を流しながらゴリオの看病にあたっていた医学生の時から晩年『従妹ベット』に至るまで、一貫して患者に寄り添い医学に情熱を注ぐ誠実なビアンションが見ることができた。彼は医学を通して人間の内側と、人間をとりまく社会の問題を見つめているのだ。内と外の両側面から人間や物事を理解することができる。これがビアンションの他の登場人物とは違う立ち位置といえるだろう。

6．まとめ

読者として物語を読み進めるとき、ビアンションが登場すると嬉しい。待ってました！と膝を叩きたくなる。ビアンションが登場するのはいつもとっておきの場面だからだ。町医者が診てもどうにもならず、いよいよパリ一の名医が登場するとなると、物語が佳境に入ったのだと感じる。ビアンション先生が直々に見に来るのだから、大事な場面なのだと読者も構える。人生のクライマックスともいえる死を前に、大事な告白があったり、隠されていた真実が明らかになったりするからだ。ビアンションは波乱万丈な『人間喜劇』の登場人物たちに寄り添い、彼らとともに、人間と人間社会の在り方を目の当たりにしてきた。『カディニャン公妃の秘密』(1839) のなかでバルザックは「社交界」について「自然が種の永続のみを考えたのに対して、欲望の永続を創造した[32]」と書いているがまさにそうである。この欲にまみれる人間界をさまざまな動物と対比させながら表現するビアンションは、作者バルザックの立ち位置と重なるのではないだろうか。

「フランス社会は歴史家になろうとしていた。私はその秘書になりさえすればよかった」というのは1842年『人間喜劇』の＜総序＞の中でバルザックが言っている有名な言葉だが、この秘書（secrétaire）というのは書き取る者であると同時に＜総序＞の文脈においては観察し、分析する者であり、言葉の古い意味

では打ち明け話を聞く人、secret を預けられる人である。これはまさにビアンションに付与された役割ではないだろうか。すなわち、『人間喜劇』においてビアンションは作家バルザックに代わって世界を観察し、分析し、語る役割であり、俯瞰の視点を持った役者なのである。観察する者であってされる者ではない。よってこの立ち位置が決定した『無神論者のミサ』以降、ビアンションが動物にたとえられることが無くなったのだと考えられる。動物にたとえる側になったということだ。さらにビアンションの特異性は一歩引いたところから作者のように物語を観察しているだけでなく、自身も『人間喜劇』の重要なプレイヤー、演者として登場人物の感情に寄り添うという、両側面を持っている点にある。ビアンション自身が言っていた「病気を見ながら病人を見る」、「身体を解き明かしながら魂を解き明かす」という術を使うことでバルザックは登場人物たちを生き生きと描くことに成功しているのだろう。

1850年、バルザックが病に倒れ死の床で言ったのは「ビアンションを呼んでくれ」という言葉であったという。現実と自らが作り出した『人間喜劇』の世界の区別がつかなくなったのか、あの名医なら私を治してくれる、と思ったのか、または数々の個性的な登場人物たちと同じように自分もビアンションに最期を看取ってほしいと思ったのだろうか。バルザックにとって自分のほかに世界を俯瞰して見ることのできる、分身のような存在としてビアンションを可愛がっていたのは確かだろう。余談ではあるが晩年の作品『従妹ベット』を書いた時バルザックは47歳であったが、作中のビアンションは46歳とほぼ同い年の設定であるし Honoré de Balzac と Horace Bianchon は共に同じイニシャルであることも象徴的に見える。ともに『人間喜劇』を俯瞰してきた人生である。

（別表）

哺乳類			
猫	馬	雌ライオン	ライオン
虎	猿	山犬	番犬
羊	イノシシ	白熊	ぶな豹
狼	大型犬	子犬	アンゴラ猫
狐	豹	牛	牝牛
鹿	牝鹿	子鹿	雄鹿

駿馬	馬車馬	雌ヤギ	カモシカ
キリン	牧羊犬	プードル犬	騾馬
うさぎ	白テン	オランウータン	ロバ
ハイエナ	豚	ブルドッグ	ゾウ
ニューファンドランド犬	オオヤマ猫	ジャガー	家畜
獣	リス	ビーバ	ネズミ
オコジョ	子ネズミ	大ネズミ	ハツカネズミ
飼い犬	熊	ラクダ	モグラ

爬虫類			
蛇	カタツムリ	トカゲ	毒蛇
蝙蝠	ヒキガエル	マムシ	

水生生物			
イカ	カメ	コバンザメ	アザラシ
シビレエイ	サメ	魚	うなぎ
ザリガニ	ワニ		

鳥			
燕	鳩	雄鶏	オウム
ハゲタカ	ムクドリ	雀	カササギ
鷲	白鳥	カラス	孔雀
キジバト	ヒバリ	フクロウ	みみずく
ひな鳥	コウノトリ	紅鶴	ウグイス
山鳩	ベンガル雀	ヤマウズラ	七面鳥
トンビ	雷鳥	コマドリ	夜泣き鶯
白いツグミ	カナリア	アヒル	渡り鳥
シャコ			

昆虫			
アリ	コガネムシ	ハエ	ミツバチ
蝶	蜘蛛	スズメバチ	蚊
芋虫	セミ	カトグザンダ	

怪物			
スフィンクス	怪物	ドラゴン	サテュロス
キマイラ			

註

（1） Honoré de Balzac, *Avant-propos à La Comédie humaine*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », vol.12. 1981, p.17.

（2）

1.「動物性と怪物性：バルザック『従妹ベット』に見る登場人物の変容」『AZUR』第14号，成城大学フランス語フランス文化研究会、2013年３月、pp.1-20.

2.「バルザックにおける動物表現：『谷間の百合』と『ゴリオ爺さん』における鳥の表現」『AZUR』第16号、成城大学フランス語フランス文化研究会、成城大学、2015年３月、pp.21-44.

3.「バルザックにおける動物表現（２）『アデュー』と『砂漠の情熱』の場合」『AZUR』第17号、成城大学フランス語フランス文化研究会、2015年３月、2016年３月、pp.39-57.

4.「なぜドラクロワとバルザックは動物に関心を示したのか：félin ネコ科の猛獣をめぐって」『AZUR』第18号、成城大学フランス語フランス文化研究会、成城大学、2017年３月、pp.27-44.

5.「バルザックと動物：人間喜劇は動物喜劇か」『AZUR』第19号、成城大学フランス語フランス文化研究会、成城大学、2018年３月、pp.31-49.

6.「怪物化する『従妹ベット』とは」『AZUR』第20号、成城大学フランス語フランス文化研究会、成城大学、2019年３月、pp.45-64.

7.「バルザックにおけるグローカルとは」『グローカル研究』第６号、成城大学グローカル研究センター、2019年11月、pp.49-66.

8.（成城大学フランス語フランス文化研究会総会における研究発表）「－バルザック『従妹ベット』に見る登場人物の変容－」（30分）、於：成城大学、2013年６月.

9.（成城大学フランス語フランス文化研究会総会における研究発表）「バルザックにおける動物表現－『谷間の百合』と『ゴリオ爺さん』における鳥の表現－」（30分）、於：成城大学、2014年７月.

10.（関東バルザック研究会における研究発表）「バルザック人間喜劇における動物比喩表現―Félin【ネコ科の動物】に例えられる登場人物たち―」（30分）、於：上智大学、2015年12月.

11.（日本フランス語フランス文学会・春季大会における研究発表）「バルザックの動物比喩表現―『ゴリオ爺さん』における動物の世界―」（30分）、於：学習院大学、2016年５月.

12.（成城大学フランス語フランス文化研究会総会における研究発表）「バルザック

における動物表現２－『アデュー』と『砂漠の情熱』の場合－」（30分）、於：成城大学、2016年７月.

13.（成城大学フランス語フランス文化研究会総会における研究発表）「バルザックと動物の関係」（30分）、於：成城大学、2017年７月.

14.（成城大学フランス語フランス文化研究会総会における研究発表）「社交空間に表れる動物性」（30分）、於：成城大学、2018年６月.

15.（成城大学グローカル研究センター「越境の表象」シンポジウムでの研究発表）「バルザックにおけるグローカルとは」（30分）、於：成城大学、2018年12月.

16.（関東バルザック研究会における研究発表）「怪物化する『従妹ベット』とは」（30分）、於：上智大学、2018年12月.

17.（日本フランス語フランス文学会・春季大会ワークショップ）「動物／人間／仮面―バルザック『人間喜劇』における動物比喩」（30分）、於：成城大学、2019年３月.

18.（成城大学フランス語フランス文化研究会総会における研究発表）「バルザック『人間喜劇』において動物比喩の少ない作品とは」（30分）、於：成城大学、2019年６月.

（３）『三十女』（1828-1844）『結婚の生理学』（1829）『女性研究』（1830）『ソーの舞踏会』（1830）『毬打つ猫の店』（1830）『二重家族』（1830）『アデュー』（1830）『砂漠の情熱』（1830）『あら皮』（1831）『知られざる傑作』（1831）『捨てられた女』（1832）『田舎医者』（1833）『ウージェニー・グランデ』（1833）『フェラギュス』（1833）『歩き方の理論』（1833）『ランジェ公爵夫人』（1834）『ゴリオ爺さん』（1834）『幻滅』（1835-1843）『金色の眼の娘』（1835）『結婚生活』（1835）『谷間の百合』（1836）『無神論者のミサ』（1836）『禁治産』（1836）『老嬢』（1836）『セザール・ビロトー』（1837）『ニュシンゲン銀行』（1837）『村の司祭』（1837-1845）『平役人』（1838）『娼婦の栄光と悲惨』（1838-1847）『ベアトリックス』（1838）『カディニャン公妃の秘密』『ピエレット』（1839）（1839）『偽りの愛人』『ボエームの王』（1839-1845）（1841）『二人の若妻の手記』（1841）『続女性研究』（1842,1845）『人生の門出』（1842）『田舎ミューズ』（1843）『オノリーヌ』（1843）『モデスト・ミニョン』（1844）『現代の裏面』（1846）『結婚生活の小さな悲惨』（1846）『従妹ベット』（1847）『従兄ポンス』（1847）

（４）プルーストにおける鳥の研究に関しては、松田真里氏の論文、2015年、「プルースト作品における鳥の表象」、仏文研究（46）、143頁～165頁、京都大学、と福田桃子氏のシンポジウム発表、2018年、「鳥たちのフランス文学」シンポジウム、「マルセル・プルーストの鳥類学」、於慶応義塾大学、を参考にさせていただいた。

（５）**・ビアンション（Bianchon）**

【パリで医学を学ぶ医学生。パリの下宿屋ヴォケー館でラスティニャックと知り合い友人となる。様々な『人間喜劇』作品に有能な医師として登場し、治療にあたる。1836年ごろに人生の絶頂期を迎える。某病院の医院長となり、レジオン・ドヌール四等勲章を受勲した。科学アカデミー会員。】

『ゴリオ爺さん』『続・女性研究』『無神論者のミサ』『従妹ベット』『プチ・ブルジョワ』『セザール・ビロトー』『従兄ポンス』『村の司祭』『二重家族』『平役人』『女性研究』『現代史の裏面』『偽りの愛人』『オノリーヌ』『禁治産』『幻滅』『田舎医者』『二人の若妻の手記』『ニュシンゲン銀行』『ピエレット』『あら皮』『ラブイユーズ』『結婚生活の小さな悲惨』『ボエームの王』『娼婦の栄光と悲惨』『カディニャン公妃の秘密』

草稿類「ボワルージュの足取り」「フランス閑談見本」「女流作家」

計29作品に登場

・ラスティニャック（Rastignac）

【アングレームの田舎からパリに出てきた野心家の青年。下宿屋ヴォケー館で出会ったゴリオ爺さんの次女であり、ニュシンゲン男爵の妻であるデルフィーヌ・ド・ニュシンゲンの愛人になる。要領がよくどんどん出世し、1833年、ド・マルセーのもとで政務次官を務め、大臣を二度勤め、伯爵となる。】

『ゴリオ爺さん』『あら皮』『イヴの娘』『幻滅』『神と和解したメルモス』『骨董室』『娼婦の栄光と悲惨』『ソーの舞踏会』『ニュシンゲン銀行』『結婚契約』『ユルジュール・ミルエ』『禁治産』『女性研究』『ラブイユーズ』『アルシの代議士』『カディニャン公妃の秘密』『ベアトリックス』『続・女性研究』『従妹ベット』『偽りの愛人』『ボエームの王』『そうとは知らぬ喜劇役者たち』『ピエレット』

草稿類「検事の悪事」「女流作家」

合計25作品に登場

・ド・マルセー（De Marsey）

【「若い女のような美貌、高貴で女性的な美貌だが、その強い視線が印象的」な男。パリの若者たちの憧れのタイプであり、女性たちを夢中にさせることで有名。1830年７月に確立されたブルジョワ政治の立役者で、首相となる。】

『金色の眼の娘』『結婚契約』『谷間の百合』『ラブイユーズ』『続・女性研究』『セザール・ビロトー』『幻滅』『ランジェ侯爵夫人』『幻滅』『フェラギュス』『ゴプセック』『三十女』『骨董室』『二人の若妻の手記』『ソーの舞踏会』『農民』『禁治産』『娼婦の栄光と悲惨』『ユルジュール・ミルエ』『カディニャン公妃の秘密』『モデスト・ミニョン』『実業家』『ベアトリックス』『アルシの代議士』『暗黒事件』『ニュシンゲン銀行』『イヴの娘』

合計27作品に登場

・ニュッシンゲン男爵（Nucingen）

【ユダヤ人銀行家。野心のためにキリスト教に改宗する。ゴリオ爺さんの次女デルフィーヌの旦那。三度に渡り偽装倒産し、その度に財産を増やす。『人間喜劇』作品の金にまつわる場面で度々顔を出す。】

『続・女性研究』『ゴリオ爺さん』『ベアトリックス』『従妹ベット』『骨董室』『セザール・ビロトー』『結婚契約』『従兄ポンス』『そうとは知らぬ喜劇役者たち』『アルシの代議士』『平役人』『ウージェニー・グランデ』『現代史の裏面』『フェラギュス』『イヴの娘』『偽りの愛人』『金色の眼の娘』『ゴプセック』『実業家』『禁治産』『幻滅』『田舎医者』『ニュシンゲン銀行』『神と和解したメルモス』『ピエレット』『農民』『ラブイユーズ』『娼婦の栄光と悲惨』『サラジーヌ』『カディニャン公妃の秘密』

草稿類「女流作家」

合計31作品に登場

（6） Honoré de Balzac, *Le Père Goriot*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », vol.3. 1976, p.239. 『ゴリオ爺さん』における考察は以下すべてこの版を使用した。

（7） *Ibid*., p.87.

（8） *Ibid*., p.145.

（9） ビアンションはガルの骨相学について研究しているため、この場面ではフランツ・ヨーゼフ・ガル（Franz Joseph Gall, 1758-1828）による頭蓋骨の形と人間の内面のつながりをとなえた骨相学の概念を用いている。ガルの著書『神経系の解剖と生理学一般（*Anatomie et physiologie du système nerveux en général*）』は1818年に仏訳され、バルザックに大きな影響を与えた。ガルへの言及は『ゴリオ爺さん』をはじめ『人間喜劇』の全体にちりばめられている。ビアンションはまた『ゴリオ爺さん』の中で、ジャルダン・デ・プラントで行われている博物学者キュヴィエの講義にも参加しており、医学、解剖学、骨相学、博物学と多方面から人間を分析する。

（10） *Ibid*., p.348.

（11） *Ibid*., p.349.

（12） *Ibid*., p.430.

（13） 松村博史、「病気と死に向き合う医師ビアンション―『人間喜劇』における医学の視点（2）」、『近畿大学語学教育部紀要』第3巻第2号2003年。

（14） *Ibid*., p.464.

（15） *Ibid*., p.465.

（16） Honoré de Balzac, *La Messe de l'athée*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », vol.3. 1976, p.388.

『無神論者のミサ』における考察は以下すべてこの版を使用した。

（17） *Ibid*., p.389.

（18） *Ibid*., p.390.

（19） Honoré de Balzac, *L'interdiction*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », vol.3. 1976, p.303.

『禁治産』における考察は以下すべてこの版を使用した。

（20） *Le Père Goriot*, p.137.

（21） *Ibid*., p.305.

（22） *Ibid*., p.308.

（23） *Ibid*., p.308.

（24） *Ibid*., p.311.

（25） *Ibid*., p.312.

（26） *Ibid*., p.360.

（27） Honoré de Balzac, *Le Colonel Chabert* édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », vol.3. 1976.

（28） （草稿時）Crois-moi, les avoués, les médecins, les juges et les usuriers sont habitués à juger les hommes, et je m'y connais.

（『クロニック・ド・パリ』掲載時）Crois-moi, les médecins sont habitués à juger les hommes et les choses.

L'interdiction, histoire du texte, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », vol.3. 1976, p.1384.

（29） Honoré de Balzac, *La Cousine Bette*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », vol.7. 1976, p.427.

『従妹ベット』における考察は以下すべてこの版を使用した。

（30） *Ibid*., p.427.

（31） *Ibid*., p.427.

（32） Honoré de Balzac, *Le secrets de la princesse Cadignan*, Œuvres complètes de H. de Balzac, Société d'éditions littéraires et artistiques, Pris, tome4, p.313.